

吉備国際大学

学術フロンティアシンポジウム

「学術フロンティア推進事業のこれまでとこれから」

文化財技術文化史的研究

臼井 洋輔

失礼いたします。トップバッターを務めさせていただきます臼井洋輔でございます。

まず、私が担当しました「文化財を通しての技術文化史的研究」は、いわゆる文化財などに込められたかつての先人の技術とか思いとか、英知や美意識とかそういうものを、今日において解明し、それをまた現代に生かす、将来に生かすという、そういうふうなことをやっているわけです。

最初にお話しするのは、まず文化財の実物資料から、我々がいろいろな情報を得るという手順とその大切さであります。

そうした場合に、まず県下に実物資料の殿堂である博物館の実態を知っておくことは誰にとっても大切なことです。いわゆる実物資料の典型的なとか、代表的なもの、時代的な基準となるものというのは博物館にあるはずで、そういうことで、多くの研究者層が研究しやすいように、あるいはこれから学問をする人が分かりやすいようにということで、「県下の全博物館の総覧」を作ることを最初に行いました。

県下にどのくらいの博物館や美術館があるかということを知れば、おそらく皆さんびっくりすると思いますけれども、300館ございます。特に岡山は、日本で人口当たりとか面積当たりからすれば、一番多い数を誇っております。それが分かりやすいように、あるいはそういう所を初めて訪ねるときに訪ねやすいようにということで、コンパクトな総覧を作って、最終的にはポケットに入るぐらいのこういうもの（『岡山の宝箱』）の出版にこぎつけました。だから、これは学生なり一般の人なりがちょっとポケットに入れて、いつでも見れるところから見えていくというふうなものとして、まず手始めにやった一番目の仕事でございます。

そしてもう一つは、その文化財にノックするときはどうやってノックするか。文化財というのは黙って何も言わないものですが、ノックの仕方によってはいくらでもおしゃべりが聞こえるようにということで、続けてこういう本（『岡山の文化財』）も出しました。

そして次は、原始古代と古代と中世とそれぞれ三代ずつに分けて、その中で大きな謎を抱えているものに対して、次々と挑戦してみたことをこれからいろいろと発表させていただきます。

まず、これは古代の部類になります。古代の部分で「古代鑄造ビーズ製作技法の研究」というものを行いました。ビーズというのは、実は3種類方法がありまして、棒に溶かしたガラスをくるっと巻くというビーズの製作技法と、そしてもう一つは、ちくわのようなものを作って、それを引っ張ることによって細い中空のガラス管を作ります。それを折って行って、フライパン状のもので熱をかけて角張った折口を丸めるというやり方、そして、三番目の方法は、実は一番新しく発見された方法です。いわゆる鑄造（鑄型）によってビーズを作るという技法です。

ところが、これ（鑄造）に関しては20年ぐらい前から発見されるようになった新しい技法ですが、実はどうやって作ったかは全く考古学の世界では謎になっておりました。この写真のものは平城京跡から出た土型ですが、藤原京とか平城宮とかそういうところからどんどん出てきて、今では九州から関東の方まで出てきています。土型には孔が開いているのですけれども、

孔の中にもう1つ孔が開いているわけです。考古学者は、この土型でなんとかビーズの作り方を復元したいということで、いろいろな挑戦したわけですが、ほとんど失敗しているわけです。それは何故失敗しているかという、やはり底の小さな孔の中に針金を通して、そして針金と型孔の隙間に溶けたガラスを注ぎ込むと考えたのです。この写真はるつぼの蓋です。当然るつぼも出てくるわけです。だからそれで溶かしたものを土型に入れたのだらうと、こういうふうな検討がずっとなされてきたわけです。

ところがNGOで活躍して日本へ帰ってきた人が「こんなことをやってきたよ」と言って写真を見せてくれた中に、実はこれ（日本のもの）と全く同じもの、もちろん出土するものは壊れているのですけれども、壊れていない丸いもので全く同じ土型が写っていたということです。

長年疑問に思っていて、本当はどうやったんだらう、なぜ再現できないのだらうと思っていたところだったものですから、これはすぐアフリカに行ってみなければならぬということで、西アフリカのガーナとブルキナファソへ飛んでいきました。この写真で見ると、中にちょっと細かい孔が開いているのが見えるかと思いますが、これが多孔土盤の本当の様子です。

ところが、現実には、針金が刺さったまま出てくる土型は1例もないのです。しかも、針金というのはガラスとの親和性が良くて、ガラスにくっついたら抜けなくなるのです。だからそんなことではできないわけです。

この写真が「るつぼ」です。これは平城京跡から出たものですが、同時にこういう土型が今や全国から出てくる。これは藤原京から出てきたるつぼですけれども、こういうふうな原料となる色ガラスと一緒に出土するのです。このことから当時非常に美しいクリアなビーズを作っていた様子が分かります。

それで、ガーナに飛んで行きますと、毎週のように、ここではビーズマーケットというものが開かれています。なぜそういうことがやられているかという、日本では実は4世紀から8世紀の間では型で作られていました。しかしそれ以降ビーズを身につけるといふ風習はなくなってあります。ところがアフリカのほうは、女性は赤ん坊から亡くなるまで、ビーズというのは全くの必需品で、着けていない人は一人もいないのです。だから、今でも作っているのだといえると思います。

特に歴史認識の中で、日本の歴史というのは縦に歴史があるといわれています。エジプトとかあるいはアフリカとか中国とかを考えたら分かるように、例えばエジプトだったらカイロというのは東京と全く変わりませんけれども、それがちょっと4キロぐらいに位置するギザのピラミッドのあたりまで行くと、5000年前の壁画に描かれているのと同じような道具を使って現代も農業をやっている。つまりこれは歴史は横にあるわけです。過去のものが全て自分の目の前にあるのです。ところが日本の場合は、今から50年前の生活をしている人は全くいません。100年はもちろんいない。1000年や2000年だと絶対にいないわけですが、こういうときに、日本の国内だけで果たして文化というのは究明できるのかどうかということ強く感じるわけです。特にガーナに行きますと、こうやって日本の過去を見ることもできるというわけで、そういうことをヒントにして、「では、ガーナのビーズ作りはどんなものなのか」ということを調べることもなるわけです。ただ調べるだけではなくて、普通は現地調べて民族文化人類学的に報告書を出したらそれで終わるわけですが、実は私はその技術をもって現実に行って日本における当時の技術を解明してみようということへ一歩進めたのです。

この写真はブレスレットで、別にゆでだこではありませんけれども、非常に膨大な量が市場に持ってこられて、毎週毎週さばかれています。これぐらいたくさんの方が需要があるということでもあります。しかも驚くことに、ほとんどマーケットを仕切っているのは女性です。これは商業というものの原初形態でもあるのだらうと思います。というのが日本の商業の始まりというのは、一遍上人聖絵「福岡の市」に見ることができます。これより古い時代に商業はありません。もちろん商品もありません。これを見たら分かると思うのですが、全てとっていいほど商業をやっているのはガーナも700年前の日本も女性です。だから、ガーナの市場は結構日本の過去をほうふつとさせる現場でもあったわけです。日銭を稼いでいるのはほとんど女性です。押し売りではないけれど、「あなた、買ってらっしゃいよ」と言って押し問答をしているような場面も何故かほとんどが女性です。

ビーズはどうやって作るかといいますと、基本的にはガラスを粉にして、それをさっきの孔の中に入れて溶かすわけです。

当然ですけれども、アフリカでは窓ガラスも商品として売られています。

まず土型を作る場合の粘土はどうやって採っているのかということを見ると、それは簡単なことだったのです。目に見える周囲を見渡すと、あっちにも蟻塚、こっちにも蟻塚があります。これを失敬してきたら、上等な粘土になる。それはそうでしょう、粒子が整っているということで納得です。

まずここに瓶があります。ワイン瓶とかいろいろな瓶があつて、これを布でくるんで、それをかなづちでガツンとたたいて、あとは石でガンガン砕いていって粉にするという手法をとっております。これは粉にした状態です。これはじょうごで、こうやってガラス粉を土型に注ぐものです。これが多孔土盤という土型です。よく見ると、この中に全部孔が開いています。これにある棒を立ててするわけですが、なんと驚くことに、日本では実験した誰もが針金で行おうとしたのです。針金使用ということから抜け出られなかったわけですが、向こうではキャッサバという燃えてしまうものを突っ込んでいます。これは全く想像外です。誰も想像することができなかったわけです。

これは孔を開ける道具でありまして、この道具の先にさらに小さな竹がついています。これがいわゆる日本人が針金を差すためではないかといわれている孔を作るものですが、細い竹です。竹に竹を差した同心円状ですから、1回つけば、孔が同時に大小2つ開くということになっております。これが針金だとすると、どういうことが矛盾しているかといいますと、日本に針金ができるのは中世でしかできません。古代に針金はないです。それからしてもおかしいということが、本来は分からなければならなかったのです。それは孔をあけた後に針金を差すと、一点ずつバラツキをもつはずですが、現実にはすべて同心円です。

これがビーズを作るときの炉です。これは結構原始的に見えるけれども、非常に合理的にできておりまして、向こうから火を焚いて、天井を低くしている。そして、ロストルの下から焚くということは、輻射熱で上からも下からも均等に焼くということを意味しております。

これは日本でいうと、磨石（すりいし）と凹石というのがあるのですけれども、これの中で昔いろんな栗とかどんぐりを砕いたとか粉碎にするとかそういう道具も出てきますけれども、向こうで実はビーズを磨くのは、ここら辺にある砂をドバツと凹石に入れて泥と一緒にギコギコ磨くと、表面がきれいになっていくのです。こういうふうなやり方で、ビーズを作って磨い

ておりました。

そして、多孔土盤も自分で作るためには、詳細に見てこななければいけないのです。こういうふうには粘土をホットケーキ状にして、そしてこれを作るところから、現地の人が最初から作って見せてくれましたけれども、こうやってポッポッと突いて孔を開けていくのです。ところが、簡単だと思って日本に帰ってすぐやったら失敗しまして、何故失敗したのかをそのあとフィードバックして写真をよく見ると、彼が何をしているかという、このところ（周囲の、正に孔をあけようとするそのすぐ外）を親指で押さえながら押しているわけです。私はそれが分からなかったもので、最初はブスブスと押していくと最後に全体の真ん中が盛り上がってきて、逆に周辺はひびが入っていくという、そういう間違いも起こしました。ましてこんなものを現地で見なければ、写真を撮らなければ、本当のこういう型、当時のままの型を再現することも不可能だったと思います。

これが割れたものの断面で、当然割れていても何回も使います。だから藤原京とか平城京から出てくるものもたいてい割れたものです。あれは壊れて捨てているのではなくて、ああいうものも使っているわけです。だいたいこれぐらいの深さに孔を作って、これがさらに底に孔が開いている部分です。この写真は、今キャッサバが入っている状態です。この孔にガラスの粉を入れるということです。孔の深さが1センチぐらいですが、幅や長さが6ミリぐらいのビーズを作る様子です。こうやってほんぽんと作ります。

日本での土型によるビーズ製作というのは、当時マスプロダクションの第1号だろうと思います。ビーズもガラス以前では宝石、水晶とかメノウとかいうのは1工程のとりかかりで1個しかできませんし、ものすごく年月がかかったはずで。

これは型でやるわけですから、一度に多く出来て、大変大金持ちになっただろうと思います。これはなぜこうやって上端をスライスに切っているかという、カミソリの刃で削りとばす、ちょうど型と面一に切ると、上にザッと粉をふり撒いた時、あと手箒でパッと払うと、全部同じ量の粉が孔に入るわけです。だからこういう均等なものに仕上がっていくという感じになっております。

これは現地の人で作った多孔土盤で、ちょんちょんと孔を開けたものですが、これぐらい隣同士をきれいにくっついていても型が崩れずひび割れない。しかも中央部も盛り上がることなく平面になっている。自分でやると、こんなにたくさん孔を開けるのは難しいのです。やはり、彼らにはかなり高度なテクニックがあるということです。なかなか優れた職人芸だと思います。

それからビーズの取り出し方ですが、バサッとふたをかぶせるように伏せると、全部バラバラと落ちるのですが、量とか板の部屋がなくたいが土間ですから、そういうことをしたらあとで大変ということで、この写真では針金を通して1本ずつすくい出しているわけです。写真の中で孔の白いところはすくい出した跡で、黒いところはまだビーズが残っている。こうやって焼くわけです。

土型はここで見るように結構割れたものを使っています。この写真は第一次焼成です。これも日本人には分からなかったことですが、ビーズを作るためには絶対に2回焼かないとできません。1回目にこうやって中の芯だけ焼くわけです。そのときは、燃えた灰がコーティングされて、次に焼くときにビーズの孔がつぶれないという高度な作業であります。最初、1回目焼

くときは温度が400度です。400度で40分、2回目は800度で15分焼く。このようなことは土型からは、どんなに注意深く型を見ても、「モノ」をどんなによく観察しても、何度の温度で焼いたとか何回焼いたとかいうことは普通の観察では分からないのです。だから、これも本当の復元ビーズは日本で作れなかったという理由にもなります。この写真が一次焼成の後でキャッサバが燃えて灰がコーティングされている状態です。

キャッサバというのはどのようなものかといいますと、ここに写していますけれども、イモ（地下茎）が地下に出来てきて、これを食料にします。上はこういう状態です。キャッサバが何故良いかという、実はここから、葉の軸ですけれども、ほとんど付け根から葉に至るまでの葉柄の太さが同じで、しかも断面がまん丸いのです。だからビーズの孔を作るにはこれがもってこいです。ところが日本にはキャッサバがございません。ということで、日本でキャッサバに代わるものとして、何種類も、例えば竹のひごであるとか、木のひごであるとかナナカマドであるとか、とにかくありとあらゆるもので実験しました。そうすると、絶対これだという1つにたどり着きました。そのことは後で詳しく述べます。

これはキャッサバの軸です。こういう状態ですからほとんど丸いです。これは生では使いません。生で使うと、水蒸気が出てガラスが曇ってします。これが生の状態ですが、中が綿状になっていて、綿ほど柔らかくないですけれどもこういう感じです。これが乾燥させたキャッサバです。

これは、現在現地の子が一生懸命はさみで土型上面の余分なキャッサバをチョキチョキ切っているところです。乾燥したものを切っています。この写真は全部キャッサバ芯が入った状態の写真です。おそらく日本の平城京なんかでも工房ではこういう状態がきっとあったんだろうと思います。そしてその中の何個かが出土しているというのは、放り捨てられて使わなくて、いろいろな人が持ち帰って残ったものが出てくるという感じだったんだろうと思います。これの現地の土型は平城京から出ているのと全く同じです。こういう一部分が割れて出てきていますが、だから型がまったく一緒ということとを考えると、同時発生なのか、どこから来たかということも次には考えないといけないんですけれども、私は起源はエジプトだろうと思っています。

エジプトから東に行くルートとしては、シルクロードを通して中国、朝鮮、そして日本へ来たのでしょう。もちろん朝鮮半島でも出土例はありますがそこではまだ、どうやって作ったかは分かっていません。そして西に行くルートというのは、サハラを越えてマリ共和国に行って、そこからブルキナファソに行ってガーナへ来たんだろうと思います。

それは何故そういうことがいえるかという、やはりエジプトの黄金というのは、多くのものがマリ共和国から入っていっていると云われているのですが、そのマリ共和国というのはリビングストンが探検した頃、素晴らしいテインブクトゥという都市があって、そこには高度な大学があって、高度な教育が行われていたというようなことが書かれており、マリへどんどん金と交換で入っていった。それがガーナまでいっていたのではという気がします。

それを裏付けるように、最近私が行ってから、あと1年目2年目にせきを切ったように、エジプトでもこの土型が見つかっております。そして今年の正月、ブルキナファソでたくさん古い時代の土型やビーズが出てきております。

これは、今ガラス粉を入れている状態ですけれども、例えばこういうふうに孔があって、し

かもこの針金のようなもので突っ込むと何ができるかという、ここだけ模様が変わるということ、ここで色変わりのバリエーションが生まれるということです。

それから、彼らは何を剥離剤にしたのかが重要な問題です。ガラスと型はくっついて離れなくなりますから、焼くときにこの剥離剤としての粘土を溶かしてその中に土盤を入れて浸す。そうするとこの粘土がコーティングされて剥離剤になる。ねずみ色で何となく金属っぽいような粘土でしたけれども、これをもらって帰って日本でもやったら、全くそれが剥離剤として通用するのです。でも日本にそういう剥離剤はないということで、この剥離剤に関してもいろいろなものを、例えばベビーパウダーのようなものから、それから珪藻土のようなものとか片栗粉とか、キラとか砥石の粉とか、とにかくありとあらゆる粉を使ってやりました。

ところがこれも最適なものが何であるかというのがなかなかわからなくて、これも偶然といえば偶然ですけども、九州陶磁文化館というのがあるのですが、そこに私の友人がおりまして、私が岡山で「技術とくらし」という特別展をやったときに、たくさんの焼物、九州の有田あるいは色鍋島を借りてきて開催したときに、彼が「墨はじき」という技法の原理とやり方を教えてくれました。

というのは、普通の焼物は、コバルトで線を描くと、釉薬で描く線の細さにもスムーズさにも限界があります。ダミ筆をつかっても限界があります。太くなったり細くなったり濃くなったり淡くなったりします。ところが、色鍋島はものすごくきれいで細い線が描かれている。これは、大名仕事で特殊な技法でないとできないのです。これこそが墨はじきという技法で、実は墨で最初細い線を描くわけです。その上にべたっと釉薬としての絵具を塗るわけです。そしてそれを焼くと、墨があるところだけ釉薬が吹き飛ぶわけです。それであたかも細い線が描かれているようになる。こういう技法があることを知っていたもので、日本で墨を利用したら、ばっちりこれが一番いい剥離剤であるということも発見しました。いろいろな偶然が重なって解明されるわけです。

この写真はガーナのクマシという、日本でいえば古都奈良ですが、そこにあるビーズ工房の職人さんの一家です。奥さんがいますが、「今度来るときには、みやげものにはおもちゃが欲しい。うちにはいっぱい子どもがいるから」と。そのついでに言ったことがまたすごいのです。「色の白い赤ん坊を連れてきてください。そういう子どもが欲しい」と。

これは赤ん坊のときからこういうビーズ装着状態です。だからビーズというのは生まれたときから死ぬまで必需品です。こういうことだから、今でも作っているという理由が分かってもらえるのではないかと思います。下着は着けなくてもビーズは着けているという、それぐらい彼女らにとってはビーズというのは不可欠の存在ということがいえるのではないかと思います。

それでいよいよ日本で、吉備国際大学でこれを実験しようということで、鉄乳鉢でガラスを砕いているわけです。多孔土盤も作ろうということで、ここらあたりまでは誰でもできるわけです。ここからが非常に失敗の連続であります。いろいろなことをして平らにしていって

こうやって孔を開けていくのですけれども、写真を見たら分かるように、もうすでに、ちょっと真ん中が盛り上っています。これできあがりです。当初は真ん中が膨らんでくるのは、なぜか分からなかったんですけども、さっきの写真のところまでフィードバックして返ってい

ったら、手で押さえているということが分かって、自分でやってみると、今度は成功ということで、写真もたくさん撮っておくのはばかにならないという気がしました。写真を撮っていなかったら、もっと時間がかかったと思います。

この写真もイグサでやってみたり、ススキでやってみたり竹でやってみたりといろいろなものを実験している様子です。最後に、カヤ、アシ、ヨシ、このたぐいが一番良いということを確認しました。これは、チョコチョコ切っているところです。日本でもガーナでもそうだけれども、多孔土盤の孔の配列はこういうふうな格子状にしているものと同心円状渦巻状にしているものがあります。日本で再現する場合は、最初は孔と孔をこれくらい隙間を開けていないと割れてしまうのです。これは大変難しい。この写真はいろいろな失敗段階のものですが、剥離剤がなかったらこのように溶けてくっついて出なくなるのです。

最初の頃はこういう状態で不良品ができるわけです。何故、このようにくすんでいるのか、彼らがやっているのを見て、なんだ、簡単だと思って帰ってやってみると、色がくすんでしまう。そして、形が歪んで、なかなか成功しない。でも復元実験も9回目ぐらいにやっとうようなものができるようになっていきました。

実は、溶けたガラスをくるっと巻くビーズと、そして引っ張るビーズと、そしてこのキャストイングというか鑄造するビーズとどこが違うかという、ビーズを見ればすぐ分かります。引っ張るビーズは引っ張った方向へ気泡が流れている。それから、くるっと回したものは、顕微鏡で見ても目視でも分かりますが、回した方向に気泡流れている。ところが、鑄造ビーズは、均等に丸い泡が入っている。そういうところが違います。だから出土したものを見れば、すぐどういう技法分かります。3種類しか技法がありませんが、今では的確に分かります。

これで一応完成ということです。これは、さらにバリエーションを変えてビーズができるようになっていきますと、こういう勾玉も作るのも決して難しいことではなく、あるいは四角なものだってできます。いろいろな模様のものでできます。これは千葉県金鶏塚古墳から出ているものを色、配色、配列を含めて復元したものです。だから、古墳時代にしてもこんなきれいなビーズや配列を使っていたということです。

ここからあとは、アフリカのいろいろな現状ですが、これをしていると時間がないので、ビーズ以外のことでどういふことをこれまでしてきたかをこれからちょっとだけお話しします。

次に書いておきますのは、「日本の石切技法の原点を探る」ということですがけれども、これは中世から近世に向って、いわゆるお城が山から平地に出てきます。それは、野面積み、切り込みはぎといひまして、石をそのままか、少しかち割ってから重ねていく、そして最終的には切って重ねていくという状況が急速に変化しながら生まれてきます。

初めて石を思い通りに切る時、日本では石の切り方が、矢穴といってちょっとミシン穴のようなものを開けていって、それに檜の木を入れてやかんで水をかけると、翌朝パカッと割れる。そういう技法が、中世最末期、近世初頭ころに日本では登場するわけです。いったいこれはどういふことなのか。日本の石切技術はどこからきたのかということに、これも中世の大きな疑問の1つであるために、原点としてエジプトへ行ってみると、実に5000年前からそういうことをやっている。あるいはギザのピラミッドの石室に入って見ても、やはりそういうふうなことをきちっとやっている。

何故日本へ来るまでに4000年も5000年もかかったのか。それは、やはりこうだろうと思います。1つ目は、需要というものが無い限り、入ってきてても定着しないという部分があるのではないか。

そしてもう1つは、同時発生してきたものか、どこから来たものかということを考える必要があります。中南米のインカ、アステカ、マヤ、ここではどうやってピラミッドを造るのに石を切っているのかということも見てみると、やはりあそこは新大陸で旧大陸とは全く異質の石の切り方をしているということが分かりました。それはインカの遺跡をだいたい36遺跡ぐらいい訪ねていったのですが、エジプト系とは全く違う技法です。非常におもしろい技法を使っております。そうして、実は私は岡山県の中で、鎌倉時代の矢穴を見つけているわけです。ではこの石切というのはいったいどこから来たものか、あるいは本当に鎌倉時代かということを目下調べております。

それからもう1つ、4番目に書いているのが「特殊器台の透かし文様の起源に関する研究」です。これは原始古代の仕事で、中世、古代よりもずっと前ですが、弥生時代の吉備の国というのは、日本で最も栄えていました。文化的にも政治的にも経済的にも栄えていた国ですけれども、その中で王権が継承するときにまつりごとをして、そのときだけしか使わないという特殊器台があるわけです。

その特殊器台に描かれている透かし文様が何かということが全く謎なんです。誰も分からない。それに挑戦しようと思ひまして、実はこれが何を原型としてできているかということをもまず確かめることと、そして歴史が横にあるという広い範囲の国からずっとみていくと、日本へ一番近いところでは、そういう例があるのかなのかということ調べていたときにあるヒントを見つけました。たまたま14年前に台湾の一部少数民族がこういった文様を使って肩に掛ける帯、そしてその帯が実に酋長が変わるときにそれを使うというものです。

ここではこれを渡された者が次の酋長だとみんなに指し示す役割があるのです。だから日本の王位継承と全く同じ使い方です。しかもそこに入られている文様というのが、渦巻文と三角の鋸歯文ですけれども、日本の特殊器台にも全くそのセットで入っているわけです。

彼らに、これはどうやって作る、どこから来たかを聞くと、作り方も教えてくれ、意味も教えてくれるのです。作り方はイモガイという南方系の貝ですが、その頂上の螺塔部をスライスしたものを肩帯に貼り付けているのです。それにしても、貝を何故……。貝の渦巻というのは地球上で誰が作るよりも自然界の中で一番美しい渦巻です。だから、これに古代人が心を奪われなかったはずはないということで、貝というのは誰から見ても財をなしているものに近いし、きれいだし、その美しさも変わらないというような特別な性質を持っています。貨幣に近いような意味もそこにあるわけです。イモガイというのは特にそういう貝です。ではどこからもたらされている貝か。これを着けているのは、台湾では山岳少数民族、山奥の人ですから、自分たちが貝を採ってくるわけにはいかないわけです。南方から来ていると彼らは言うのです。その南方、フィリピンとかあるいはボルネオなどずんずん追いかけしていると、南に行けば行くほどイモガイの生息数は多くなるのです。パプアニューギニアまで行くと、ものすごい量が使われている。しかも、パプアニューギニアは、その渦巻をもつイモガイというのが世界でも最大の生産地となっております。だから日本の弥生時代のこうした文様も、実は古くは東南アジアと広くつながった文化であると思われまます。だからこれも日本国内だけで何だろうとって

いる間は絶対に分からないのではないかなということ、パプアニューギニアまで行って確かめて来たわけです。

それも確かめるだけはいけませんので、現実には南方からイモガイをたくさん持ち帰り、それをスライスして、そしてどういう渦巻ができるか。切るといっても、切り方によって渦巻の文様がもちろん変わりますから、どここの部分をどう切るかというようなことを試してみました。しかもそれからずんずん歴史的にも追いかけていくと、日本でも古墳時代はもちろんですけれども、弥生時代、縄文時代というふうになんかに過去にさかのぼっても、縄文時代まで九州から関東のほうまでそれが出てきているのです。

ところで古代人は何故貝とここまでかかわるかということ、貝という字を使った文字というのは財産の財とか貨幣とか財貨の貨とかそういうふうなものを含めてものすごく30ぐらいすぐ簡単に引っ張り出せます。いかに昔の人が貝に特殊な意味を持たせたか、しかもそれは価値のあるもの、力のあるもの、そういうことで貝が重要視されたのではないかと考えております。これについては、実は文化財センターの紀要の第4号に一応報告することができました。

だいたい以上で時間がちょうどになりましたので、これで終わりとさせていただきます。ではこれでトップバッターの発表を終わらせていただきます。

本発表は、文部科学省学術フロンティア推進事業（平成15年度～平成19年度）による私学助成を得て、平成19年12月1日 キャンパスイノベーションセンター東京地区国際会議場にて行われた。